

2025 年 3 月

食料安全保障月報

(第 45 号)



令和 7 年 3 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2025 年 3 月食料安全保障月報（第 45 号）

目 次

概要編

I	2025 年 3 月の主な動き	1
II	2025 年 3 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「米国の 2025/26 年度の生産・輸出動向」	5

（資料）

1－1～3	穀物等の主要輸出国の生産量（過去 10 年平均との増減比較）	9
1－4	穀物等の国際価格の動向	1 2
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 3
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 4
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 6
5	食品小売価格の動向	2 0
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 1
7	FAO 食料価格指数	2 3

今月のコラム

「インドネシアの食料事情①：食文化（インドネシア料理）」	2 4
------------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 22.7 百万トンの見込み
	＜カナダ＞	2025/26 年度の作付意向面積は前年度から 2.6%増加の見込み（カナダ統計局）
	＜豪州＞	2024/25 年度の生産量は上方修正され 34.1 百万トンの見込み（ABARES）
	＜EU27＞	2024/25 年度の生産量は前月から下方修正され 119.0 百万トンの見込み（EC）
	＜ロシア＞	2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 45.0 百万トンの見込み
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は前月から上方修正され 23.4 百万トンの見込み
	＜中国＞	2024/25 年度の輸入量は前月から下方修正され 6.5 百万トンの見込み

2	とうもろこし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
	＜米国＞ 2024/25 年度の生産量は史上最高の前年度から 3.1%減少する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 5.9%増加する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.0%減少する見込み	
	＜ウクライナ＞2024/25 年度の生産量は、前年度より 17.5%減少する見込み	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み	
3	コメ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1 5
	＜タイ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜米国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 1.9%増加する見込み	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜インド＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 5.2%増加する見込み	
	＜ベトナム＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.8%増加する見込み	
II	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 1
	＜米国＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 4.9%増加する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 10.5%増加する見込み	
	＜カナダ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 8.4%増加する見込み (AAFC)	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、史上最高の前年度から 0.9%減少する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 1.6%増加する見込み	
	(参考 1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2024/25 年度)・・・	2 7
	(参考 2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・	2 7
	(参考 3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎) ・・・・・・・・	2 8

【利用上の注意】

表紙写真：豪州 ニューサウスウェールズ州リヴァリーナのモーラメン近郊で栽培される稲。順調に生育しており、高い収量が期待されている。(ニューサウスウェールズ州 2025 年 2 月 28 日)

(概要編)

I 2025 年 3 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2024/25 年度の作況について、北半球での収穫が終了した一方、南半球では、豪州で小麦の収穫が終了、南米で大豆等が収穫期を迎えている。

2024/25 年度の状況について、品目別にみると、3 月の米国農務省 (USDA) の需給報告によれば、小麦については、EU、ロシア、英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、豪州、米国、インド、アルゼンチンで単収・収穫面積ともに増加、カザフスタン、中国、カナダで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に史上最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する 4 者合意(黒海穀物イニシアティブ)については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU 向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル、中国、南アフリカで単収・収穫面積ともに前年度より増加するものの、米国で収穫面積が減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少、EU、ロシアで単収が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル、米国で単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO (国連食糧農業機関) が公表している食料価格指数については、主に砂糖、乳製品、植物油の価格の上昇等により、1 月の 125.1 から、2 月(最新値)は 127.1 に上昇 (参考: 2024 年 2 月 117.4、2023 年 2 月 130.7、2022 年 2 月 141.7、2021 年 2 月 116.5、2020 年 2 月 99.6)。海上運賃については、バルチック海運指数 (穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数) が、直近 5 カ年の平均値の約 9 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021 年 7 月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2025 年 3 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について (農林水産省 HP)

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 3 月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、単収が減少するものの収穫面積は増加することから、前年度より 1.7%増加し 2,340 万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より 18%減少し 2,680 万トンとなる見込み。2024/25 年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より 17%減少し 1,550 万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より 25%減少し 2,200 万トンとなる見込み。

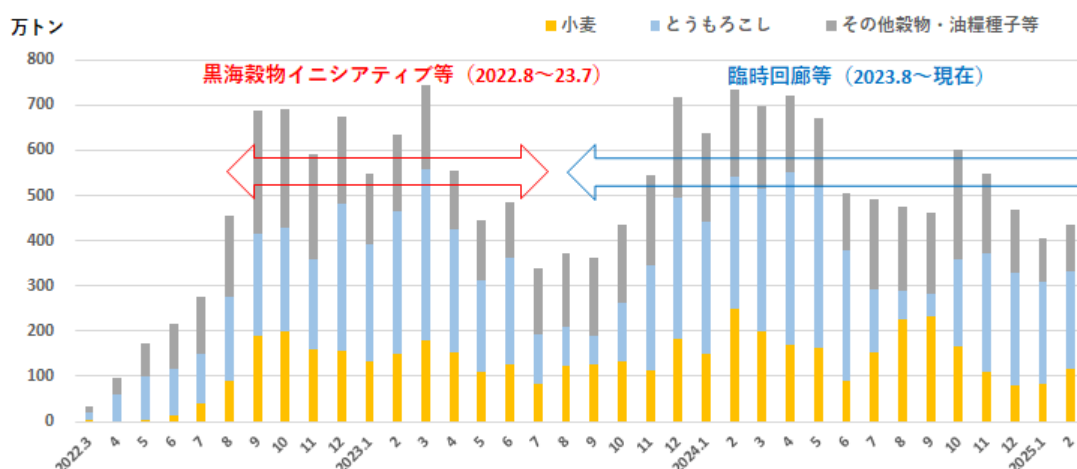
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25 年度の小麦及びとうもろこしの収穫作業は終了した。また、2025/26 年度の冬小麦の作付作業も終了している。ウクライナ気象センターによれば、2 月初めの数日は温暖な天候だったが、以降は欧州北部からの寒気により平年より寒冷な天候となった。雪やみぞれが降った地域もあったが、降水量は全国的に不足状態である。地中温度の低下は－7℃程度に保たれており、気象条件としては問題なし。一部の圃場では 5～8%の枯死が発生する可能性がある。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年8月以降、オデーサ港等3港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ビブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022年8月～23年7月）は、穀物・油糧種子等6,846万トン（うち、小麦1,728万トン、とうもろこし2,949万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022年3月～2025年2月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 豪州：小麦の生産量が過去3番目の高水準に

USDA によれば、2024/25 年度の豪州の小麦生産量は 3,410 万トンと、前月予測から 7% 上方修正され、前年度から 31% 増加し、過去 5 年平均を 14% 上回る見込み。収穫面積は 1,310 万ヘクタールと、前月予測から若干上方修正され、前年度から 6% 増加し、過去 5 年平均を 8% 上回る。単収は 2.61 トン/ヘクタールと、前月予測から 6% 上方修正され、前年度から 24% 増加し、過去 5 年平均を 8% 上回る。今年度の生産量は、収穫が進むにつれ単収が当初予測を上回り、過去 3 番目の高水準となった。豪州農業資源経済科学局 (ABARES) によれば、同国の小麦生産の 60% 以上を占めるウェスタンオーストラリア州とニューサウスウェールズ州において単収が当初予想を上回った。ニューサウスウェールズ州はシーズン開始当初から良好な土壌水分に恵まれた一方、ウェスタンオーストラリア州は乾燥状態の中でシーズンを開始したが、生育期を通じて降雨に恵まれ、最終的には平年以上の単収を達成した。

2 南アフリカ：ラニーニャ現象の降雨によりとうもろこしの生産量が増加

USDA によれば、2024/25 年度の南アフリカのとうもろこし生産量は 1,600 万トンと、前月予測から 6% 下方修正されたものの、前年度から 19% 増加する見込み。収穫面積は 300 万ヘクタールと、前月予測から 5% 下方修正され、前年度とほぼ同水準。単収は 5.33 トン/ヘクタールと、前月予測から 1% 下方修正され、過去 5 年平均とほぼ同水準であるものの、エルニーニョ現象による干ばつに見舞われた前年度からは 19% 増加している。

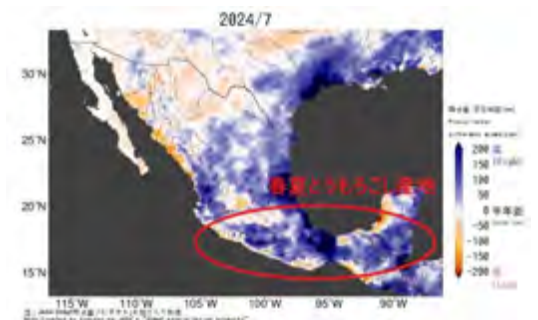
同国主要穀物協同組合によれば、早植えとうもろこしは 11 月中旬から 12 月中旬にかけて乾燥天候に見舞われたものの、1 月から 2 月にかけてラニーニャ現象による降雨に恵まれ、単収は平年並みまで回復する見込み。

3 メキシコ：北西部の乾燥によりとうもろこしの単収が減少

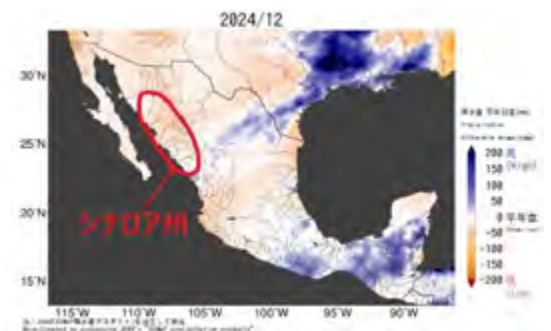
USDA によれば、メキシコの 2024/25 年度のとうもろこし生産量は 2,330 万トンと、前月予測から 2% 下方修正され、前年度から 1% 減少し、過去 5 年平均を 12% 下回る見込み。収穫面積は 640 万ヘクタールと、前月予測及び前年度より 4% 増加するものの、過去 5 年平均を 6% 下回る。単収は 3.67 トン/ヘクタールと、前月予測から 6% 下方修正され、干ばつに見舞われた前年度から 5% 減少し、過去 5 年平均を 6% 下回る。

メキシコのとうもろこしの栽培期には春夏期と秋冬期があり、主に天水灌漑により栽培される春夏とうもろこしが生産量の約 70% を占める。メキシコ農業食品漁業情報サービス (SIAP) によれば、今期、最大生産州のチアパス州では前年度並みの一方、15 州で収穫面積が増加した。これは、6 月下旬からの降雨により土壌水分が改善され、農家が前年度より春夏とうもろこしの作付面積を増加させたことによる。一方、秋冬とうもろこしの作柄は悪い。秋冬とうもろこしの約 7 割は北西部のシナロア州で栽培されるが、同州の農家によれば、高温乾燥が継続し貯水池の水位が低下している。通常、生育期に 4 回灌漑を行うところ、今年は貯水池の水を 1 回しか利用できず、地下水の水を汲み上げて 2 回目の灌漑を行う農家もいるという。

図：メキシコの降水量（平年対差）
（2024 年 7 月）



（2024 年 12 月）



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム (JASMAI)

II 2025 年 3 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2月末、190ドル/トン台後半で推移。3月に入り、米国の関税措置による報復関税に伴う米国産の需要低下懸念等を受けて190ドル/トン台前半まで下落したものの、米国小麦産地の乾燥予報やロシア産小麦の2025/26年度の収穫見通しが下方修正されたこと等を受けて上昇し、3月中旬現在、200ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、2月末、170ドル/トン台後半で推移。3月に入り、米国の対メキシコ関税に対するメキシコの報復関税の可能性による米国産の需要低下懸念等を受けて170ドル/トン台前半まで下落。その後、米国のメキシコ関税について、米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）に準拠した製品が4月2日まで対象外になることから、メキシコの報復関税による米国産の需要低下懸念が和らいだこと等を受けて180ドル/トン台前半まで上昇したものの、米国のEUに対する関税に対するEUの報復関税発表により米国産の需要低下懸念等を受けて下落し、3月中旬現在、170ドル/トン台半ばで推移。

コメは、2月末、440ドル/トン台半ばで推移。3月に入り、アジアからの需要低迷、アフリカにおけるインド産米等との競合を受けて下落し、3月中旬現在、430ドル/トン台後半で推移。

大豆は、2月末、370ドル/トン台前半で推移。3月に入り、米国の対中関税の導入に対する中国の大豆への報復関税の実施による米国産の需要低下懸念等を受けて360ドル/トン前半まで下落した。その後、2月下旬からの下げの反動等を受けて370ドル/トン台前半まで上昇したものの、ブラジルの収穫進捗等を受けて下落し、3月中旬現在、360ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.3%増の28.26億トン。消費量は、前年度より1.5%増の28.61億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り26.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.26億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.61億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、コメで増加も、小麦、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、4.89億トンの見込み。

期末在庫量は、7.58億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

（注：数値は3月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.79億トン。消費量は前年度を上回り6.69億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る20.8%となる見込み。

（注：数値は3月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」等による）

V 今月の注目情報：米国の 2025/26 年度の生産・輸出動向

米国の2024/25年度の生産量は、前年度に比べとうもろこしは減少となった一方、小麦は9%増、大豆もとうもろこしから作付けがシフトしたことにより5%増となった。

2025年2月27日、USDAは農業アウトルックフォーラムにて、2025/26年度の穀物及び油糧種子の見通しを公表した。2025/26年度の小麦・とうもろこし・大豆の生産・輸出の見通しと第二次トランプ政権の最近の政策動向についてまとめた。

注：文中の「2024/25 年度」等は市場年度で、米国の小麦は 2024 年 6 月から 2025 年 5 月、とうもろこし及び大豆は 2024 年 9 月から 2025 年 8 月。（品目別需給編 P. 27 参照）

1 2024/25 年度 の生産・輸出動向

（1）小麦

USDAによれば、2024/25年度の小麦の生産量は、収穫面積、単収ともに増加することから、前年度比9.3%増の53.7百万トンとなる見込み。これは、2016/17年度に次ぐ高水準。

2024/25年度の小麦の輸出量は、生産増による輸出余力の増加に加え、EU、ロシア、ウクライナの輸出余力の低下等を受け、前年度比18.1%増の22.7百万トンとなる見込み。これは、2021/22年度以来の水準。

（2）とうもろこし

2024/25年度のとうもろこしの生産量は、前年度比3.1%減の377.6百万トンとなる見込み。天候に恵まれ史上最高の単収を記録したものの、作付け時の価格が大豆に有利だったことから、とうもろこしから大豆に作付けがシフトし、収穫面積が4.2%減少したことによる。

2024/25年度のとうもろこしの輸出量は、米国産が価格競争力を有することから、前年度比6.9%増の62.2百万トンとなる見込み。これは、史上3番目の高水準。

（3）大豆

2024/25年度の大豆の生産量は、中西部で夏の後半から秋にかけて乾燥型の天候となったものの、生育期終盤を迎えていたため単収に大きな影響はなく、収穫面積、単収ともに前年度より増加し、前年度比4.9%増の118.8百万トンとなる見込み。これは、史上4番目の高水準。

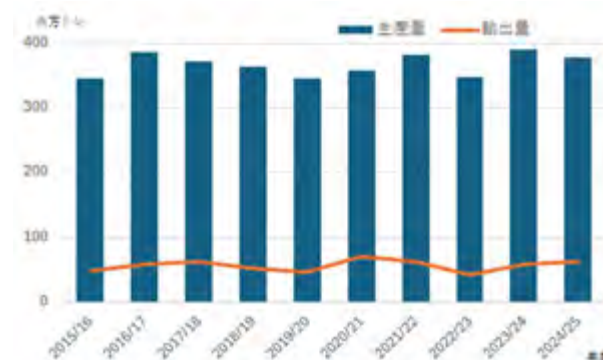
2024/25年度の大豆の輸出量は、世界の搾油用

図1 米国の小麦生産量・輸出量の推移



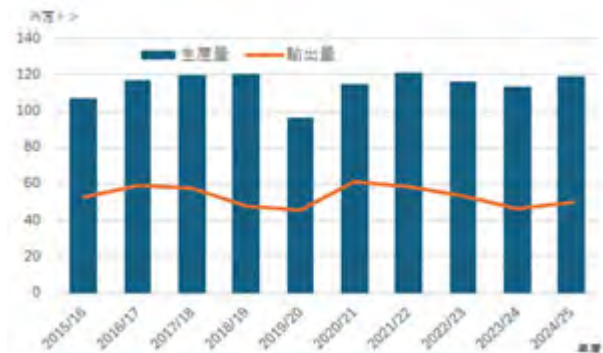
出典：USDA「PS&D」（2025.3）をもとに農林水産省で作成

図2 米国のとうもろこし生産量・輸出量の推移



出典：USDA「PS&D」（2025.3）をもとに農林水産省で作成

図3 米国の大豆生産量・輸出量の推移



出典：USDA「PS&D」（2025.3）をもとに農林水産省で作成

需要の増加に伴い、前年度比 7.7%増の 49.7 百万トンとなる見込み。

2 2025/26 年度の生産・輸出動向

(1) 小麦

USDA 農業アウトルックフォーラム (2025.2.27) によれば、2025/26 年の小麦の作付面積は、主に冬小麦の作付増により、前年比 2.0%増の 19.0 百万ヘクタールとなる見込み。春小麦とデュラム小麦の作付面積は、大豆の作付面積の減少が見込まれる北部平原での作付可能面積の増加により、前年度より増加すると見込まれるが、とうもろこしの収益増が期待されることから、作付面積の増加は限定的なものとなると予測されている。2025/26 年度の収穫面積は、過去 10 年の収穫面積/作付面積の比率に基づくと、前年度より若干減少し 1,554 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の単収は、長期的な単収の傾向に基づき、前年度比 2.0%減の 3.37 トン/ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の生産量は、収穫面積の微減と単収の減少により、前年度より 2.3%減少し 5,242 万トンとなる見込み。

2025/26 年度の小麦の輸出量は、アルゼンチン、豪州、カナダの生産量が前年度並みと予想され、輸出競争が継続することから、2,313 万トンと前年度と変更ない見込み。期末在庫量は前年度から 4.0%増の 22.48 万トン

(2) とうもろこし

2025/26 年度のとうもろこしの作付面積は、作付けが競合する大豆、綿花、ソルガム等の作物に比べて価格が有利であるため、前年度より 3.8%増の 3,804 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の単収は、平年並みの天候を仮定して、11.36 トン/ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の前年度より 4.9%増加し、3 億 9,587 万トンと史上最高を記録する見込み。

一方、2025/26 年度のとうもろこしの輸出量は、南米からの輸出量の増加に伴い、米国の世界市場でのシェアが減少すると見込まれること

表 1 米国の 2025/26 年度需給見通し (小麦)

(単位: 百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生産量	49.10	53.64	52.42	▲ 2.3
消費量	30.16	31.41	31.41	—
うち飼料用	2.31	3.27	3.27	—
輸出量	19.24	23.13	23.13	—
輸入量	3.76	3.54	2.99	▲ 15.4
期末在庫量	18.94	21.61	22.48	4.0
期末在庫率	38.3%	39.6%	41.2%	1.6
(参考)				
収穫面積(百万ha)	15.01	15.58	15.54	▲ 0.3
単収(t/ha)	3.27	3.44	3.37	▲ 2.0

出典: USDA「Agricultural Outlook Forum (2025.2.27)」をもとに農林水産省で作成
注: 換算の関係で USDA「PS&D」(2025.3) 等と数値が一致しない場合がある

写真 1 イリノイ州の収穫期を迎えた小麦畑



撮影者: ブライアン・スコット氏 (2025.7.3 撮影)

表 2 米国の 2025/26 年度需給見通し (とうもろこし)

(単位: 百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生産量	389.68	377.64	395.87	4.8
消費量	321.91	321.70	324.75	0.9
うち飼料用	147.45	146.69	149.87	2.2
エタノール用等	139.15	139.71	139.71	—
輸出量	58.22	62.23	60.96	▲ 2.0
輸入量	0.71	0.64	0.64	—
期末在庫量	44.78	39.12	49.91	27.6
期末在庫率	11.8%	10.2%	12.9%	2.8
(参考)				
収穫面積(百万ha)	35.01	33.55	34.84	3.9
単収(t/ha)	11.13	11.26	11.36	0.9

出典: USDA「Agricultural Outlook Forum (2025.2.27)」をもとに農林水産省で作成

写真 2 インディアナ州のとうもろこし畑



撮影者: キップ・トムス氏 (2025.7.2 撮影)

から前年度より 2.0%減の 6,096 万トンとなる見込み。期末在庫量は前年度から 27.6%増の 4,991 万トンと見込まれる。期末在庫率は 12.9%となり、2019/20 年度以来の高水準となる見込み。

(3) 大豆

2025/26 年度の大豆の作付面積は、価格が有利なとうもろこしに作付けがシフトすることから、前年度より 3.6%減の 3,399 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の単収は、平年並みの天候を仮定して、3.53 トン/ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の生産量は、単収の増加が収穫面積の減少によりほぼ相殺され、前年度から微増の 1 億 1,893 万トンとなる見込み。

2025/26 年度の大豆の輸出量は、世界的な大豆需要の増加に伴い、前年度より 2.2%増の 5,076 万トンとなる見込み。米国の輸出量は増加するものの、輸出シェアは引き続き 30%を下回ると予想される。期末在庫量は搾油量と輸出量の増加に伴い、前年度から 15.8%減少し、871 万トンとなる見込み。

3 第二次トランプ政権の関税政策と国際穀物価格への影響

2025 年 1 月 20 日、トランプ新大統領が就任した。2 月 1 日、国際緊急経済権限法 (IEEPA) を根拠とし、カナダとメキシコ産の全製品に 25% (ただし、カナダ産のエネルギー・資源は 10%)、中国産の全製品に 10%の追加関税を 2 月 4 日より課す大統領令を発表した。その後、トランプ大統領はメキシコとカナダに対する関税の適用を 1 か月延期したものの、中国に対する 10%の追加関税は 2 月 4 日に発動した。これを受け、中国政府は 2 月 4 日、米国産の輸入品に対し、石炭・液化天然ガスなど 8 品目に 15%、原油、農業機械など 72 品目に対して 10%の追加関税を課す措置を 2 月 10 日から実施する旨発表した。

トランプ大統領は 3 月 3 日、3 月 4 日より中国に対する追加関税をさらに 10%上乗せし、20%にする大統領令を発表した。これを受け、中国政府は 3 月 4 日、米国産の鶏肉や小麦、とうもろこしなど 29 品目に対して 15%、大豆、豚

表 3 米国の 2025/26 年度需給見通し (大豆)

(単位: 百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生産量	113.27	118.83	118.93	0.1
消費量	65.59	68.69	70.35	2.4
うち搾油用	62.24	65.59	67.36	2.7
輸出量	46.13	49.67	50.76	2.2
輸入量	0.57	0.54	0.54	-
期末在庫量	9.31	10.34	8.71	▲ 15.8
期末在庫率	8.3%	8.7%	7.2%	▲ 1.5
(参考)				
収穫面積(百万ha)	33.31	34.84	33.67	▲ 3.4
単収(t/ha)	3.40	3.41	3.53	3.6

出典: USDA 「Agricultural Outlook Forum (2025.2.27)」をもとに農林水産省で作成

写真 3 インディアナ州の収穫作業が進展する大豆畑



撮影者: ケビン・コックス氏 (2025.9.6 撮影)

図 4 直近のとうもろこしの国際価格の動向



注: 価格はシカゴ商品取引所の期近終値 (セツルメント)

図 5 直近の小麦の国際価格の動向



注: 価格はシカゴ商品取引所の期近終値 (セツルメント)

肉、牛肉、水産品、果物、野菜、乳製品など 711 品目に対して 10%の追加関税を課す措置を 3 月 10 日から実施する旨発表した。

なお、トランプ大統領は 3 月 4 日、メキシコ原産品に対して一律 25%、カナダ原産品に対しては、エネルギー・同資源に 10%、それ以外の産品に 25%の追加関税を発動したものの、3 月 6 日には、メキシコとカナダの原産品に対する追加関税の適用対象から、米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）の原産地規則を満たした産品については 4 月 2 日まで対象外とする大統領令を発表している。

また、トランプ大統領は 3 月 12 日、1962 年通商拡大法 232 条に基づき、鉄鋼・アルミニウムの輸入品に対して 25%の追加関税を発動した。これを受け、EU 欧州委員会とカナダは同日、相次いで米国に報復関税を課すと発表した。

これらの報復措置により、米国産農産物の需要は減少する可能性があり、2 月からのトランプ大統領の関税発動以来、シカゴ穀物相場は下落傾向で推移している。3 月に入り、大豆及び小麦は 1 月初旬以来の安値を、とうもろこしは 12 月中旬以来の安値を記録した。

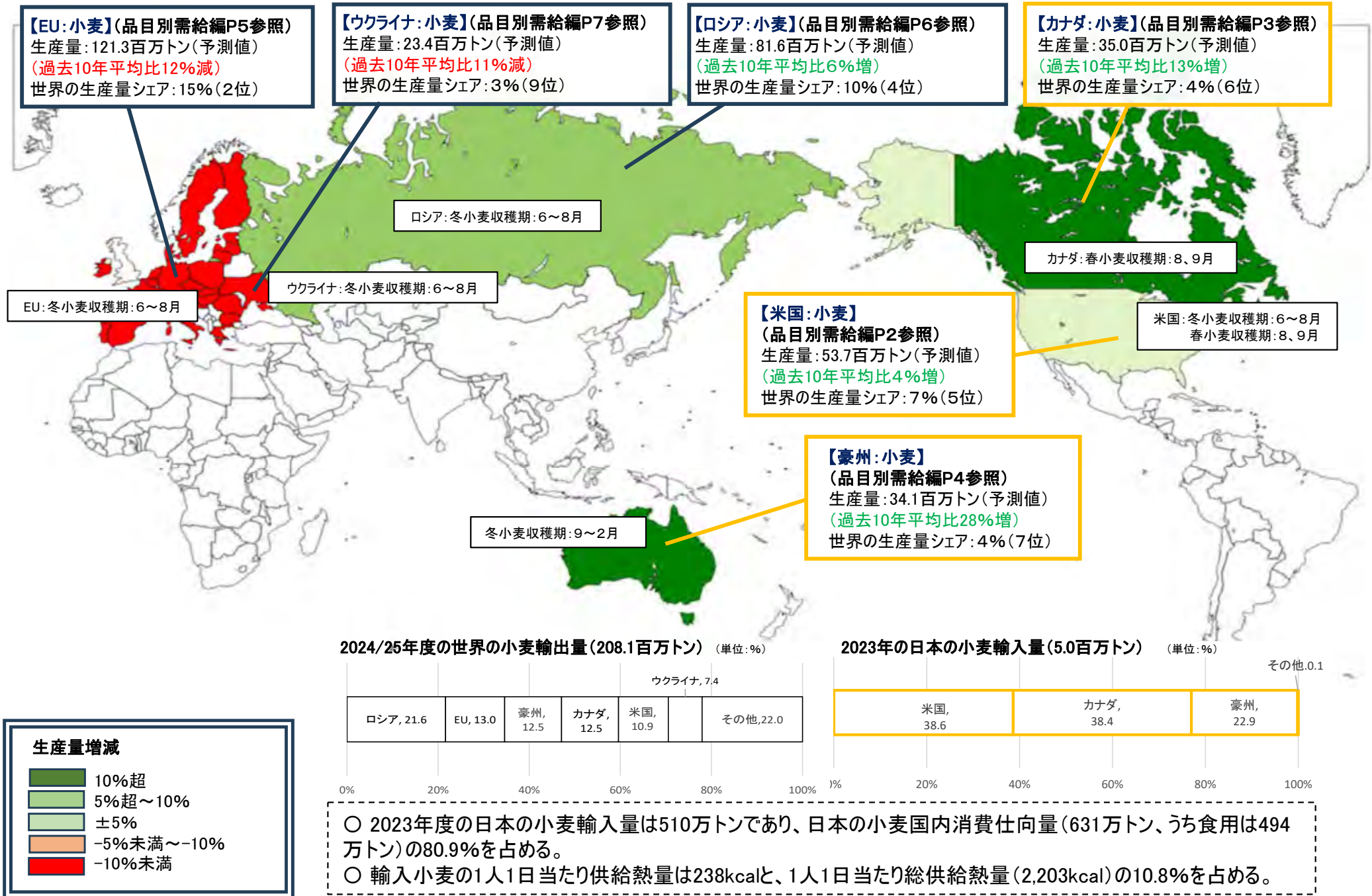
また、米国通商代表部は 2 月 21 日、中国の海事・物流・造船分野に対する 1974 年通商法 301 条に基づく措置の内容案について発表した。今回の内容案は、追加関税などの輸入制限措置ではなく、（1）中国で建造された船舶の米国の港湾への入港時の追加料金や、（2）米国製品の輸出（農産物含む）における船舶の利用条件など。当該措置は我が国の穀物輸入に大きな影響を及ぼす可能性があることから、今後の動向を注視していきたい。

図 6 直近の大豆の国際価格の動向



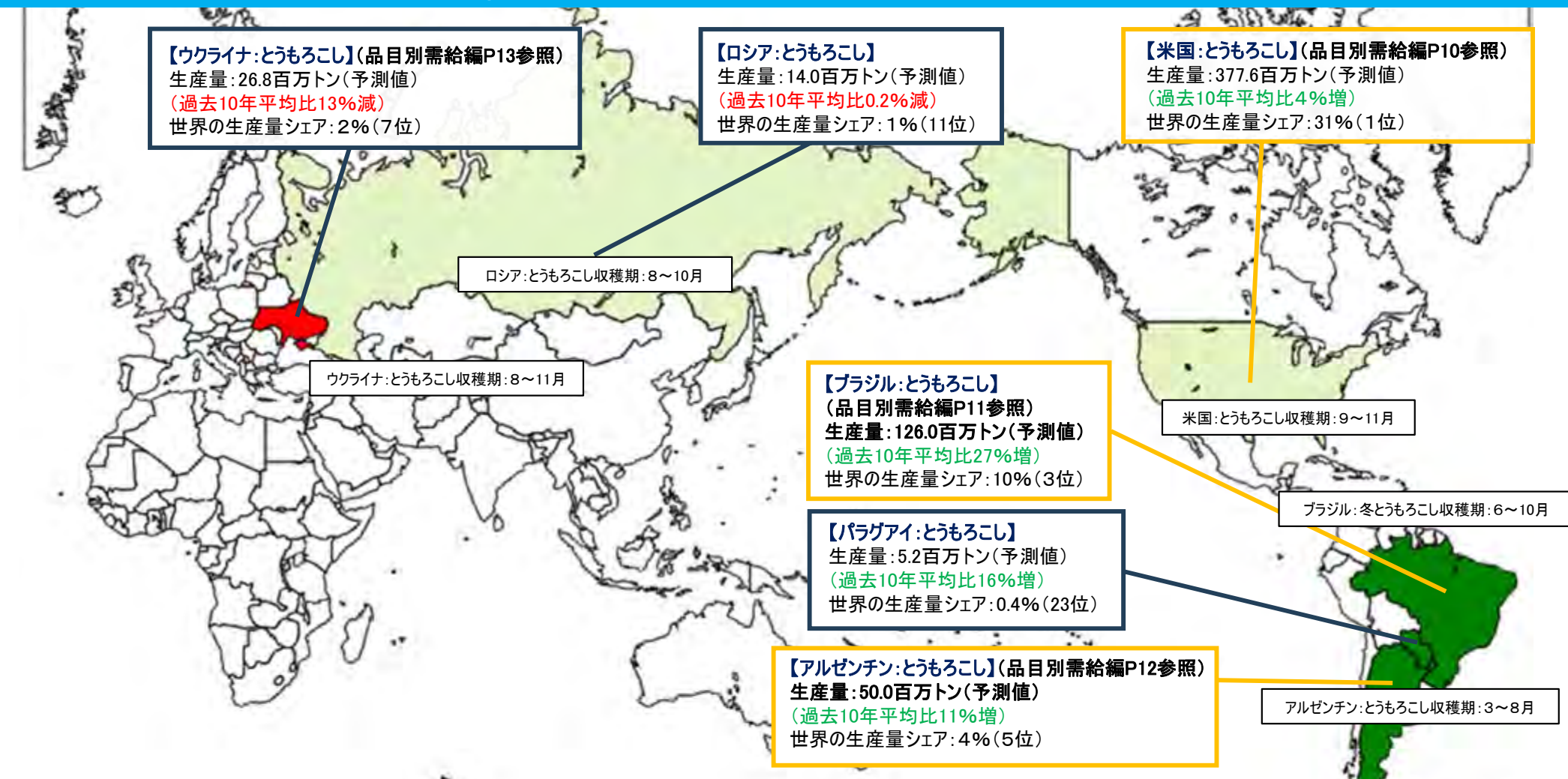
注：価格はシカゴ商品取引所の期近終値（セツルメント）

資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(3月版)

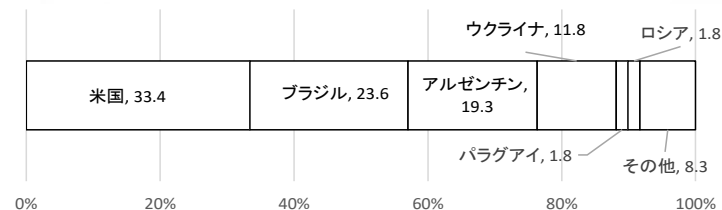


出典:USDA「PS&D」(2025.3)、財務省「貿易統計」(2023年の実績値)、農林水産省「令和5年度食料需給表」、AMIS「Supply and demand balances manual」をもとに農林水産省で作成。

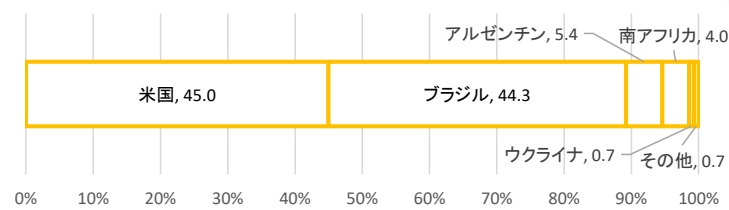
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(3月版)



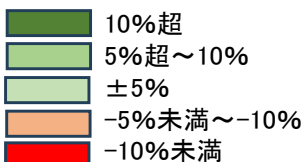
2024/25年度の世界のとうもろこし輸出量(186.4百万トン) (単位:%)



2023年の日本のとうもろこし輸入量(14.9百万トン) (単位:%)

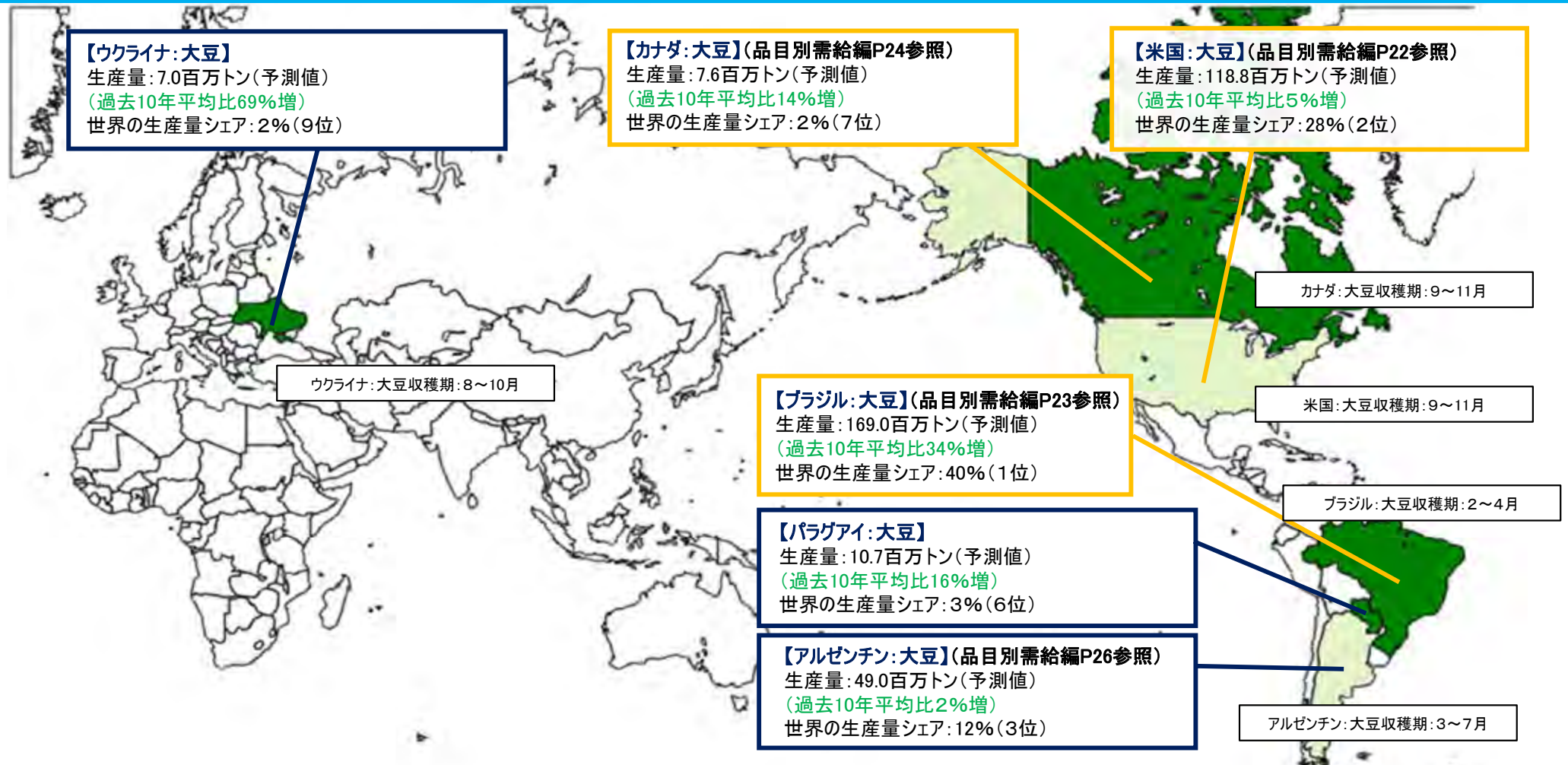


生産量増減

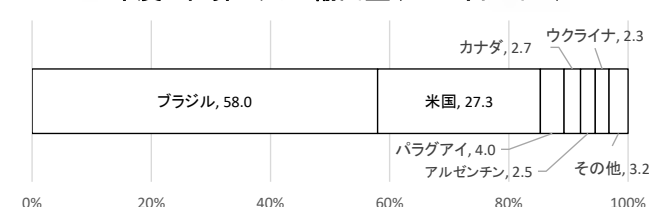


○ 2023年度の日本のとうもろこし輸入量は1,499万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,486万トン、うち飼料用は1,159万トン)のほぼ全量を占める。

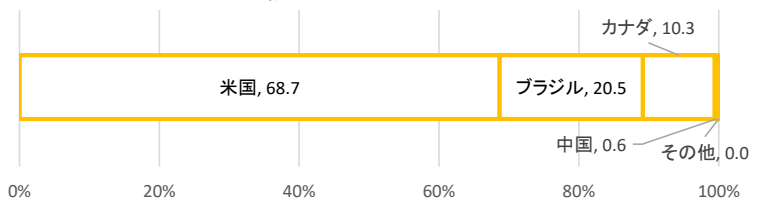
資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(3月版)



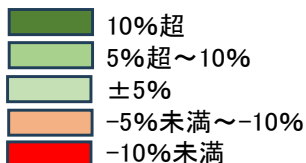
2024/25年度の世界の大豆輸出力(181.9百万トン) (単位:%)



2023年の日本の大豆輸入量(3.16百万トン) (単位:%)



生産量増減

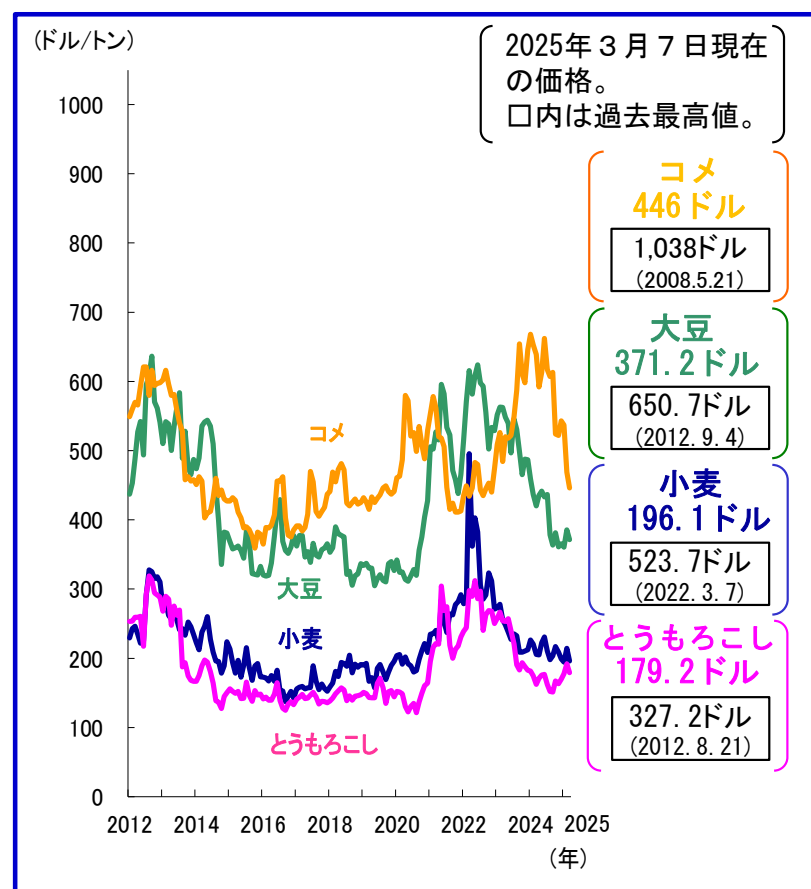
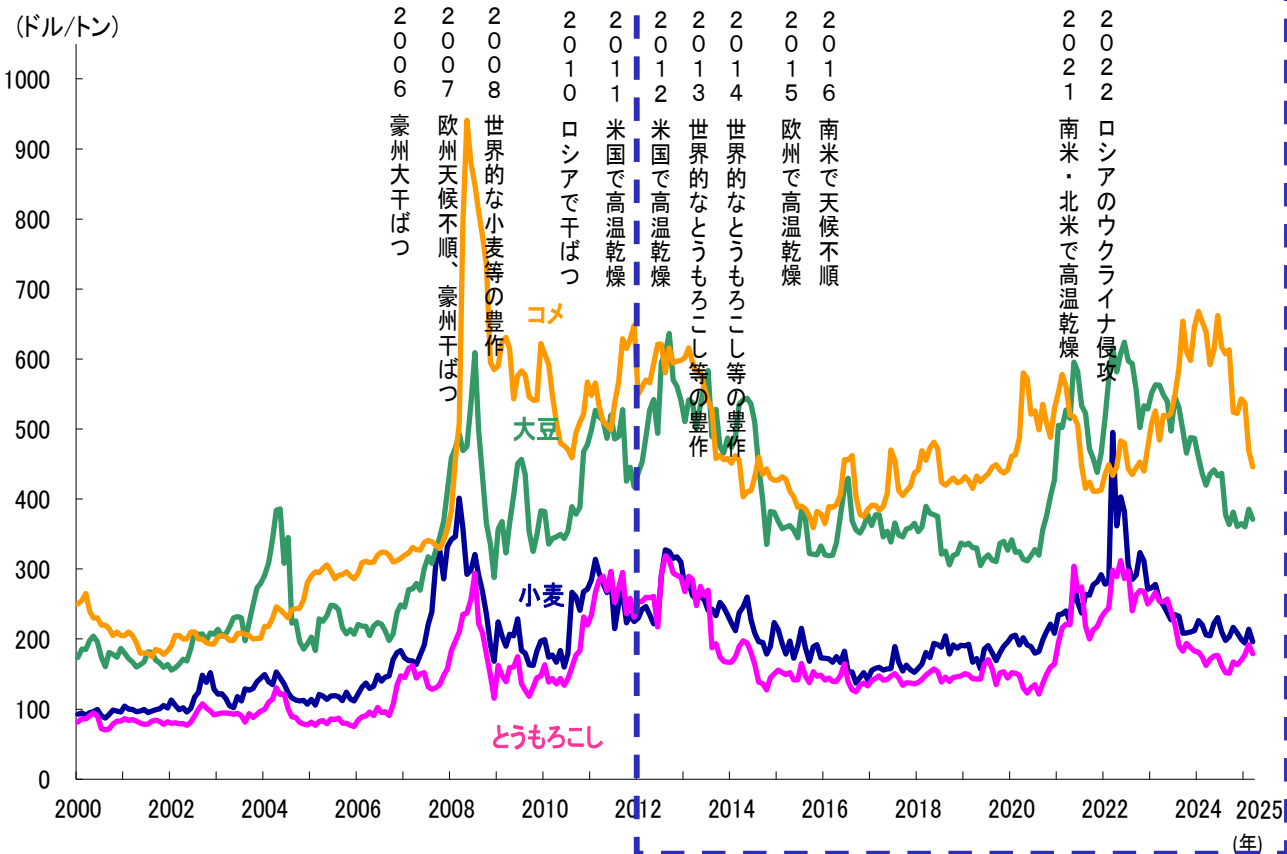


- 2023年度の日本の大豆輸入量は307万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(356万トン、うち大豆油などの加工用は255万トン、食用は87万トン)の86.2%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は55kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の2.5%を占める。

資料 1—4 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、インドの一部輸出規制解除等を受け低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



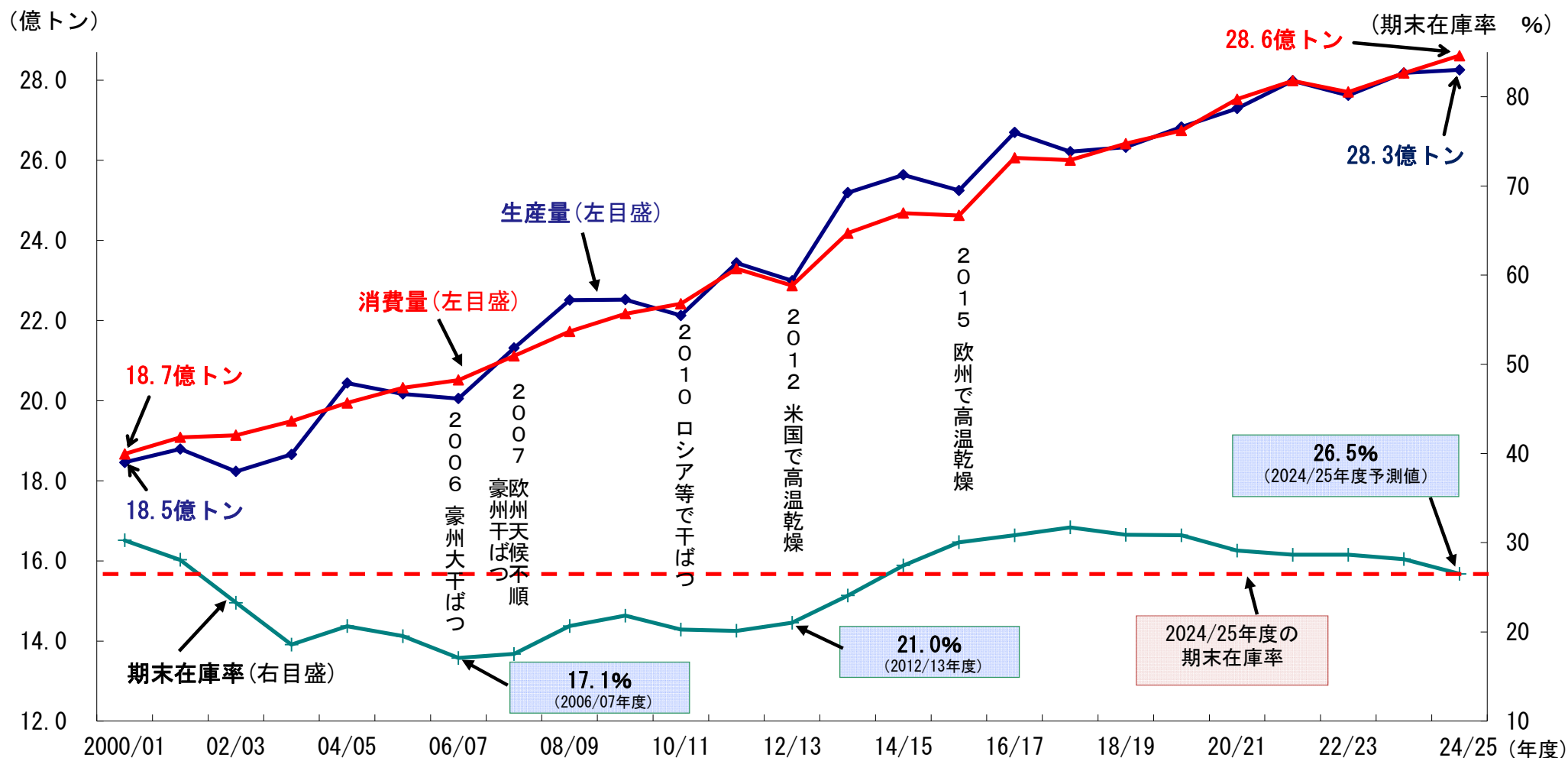
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメは2月26日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.5%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

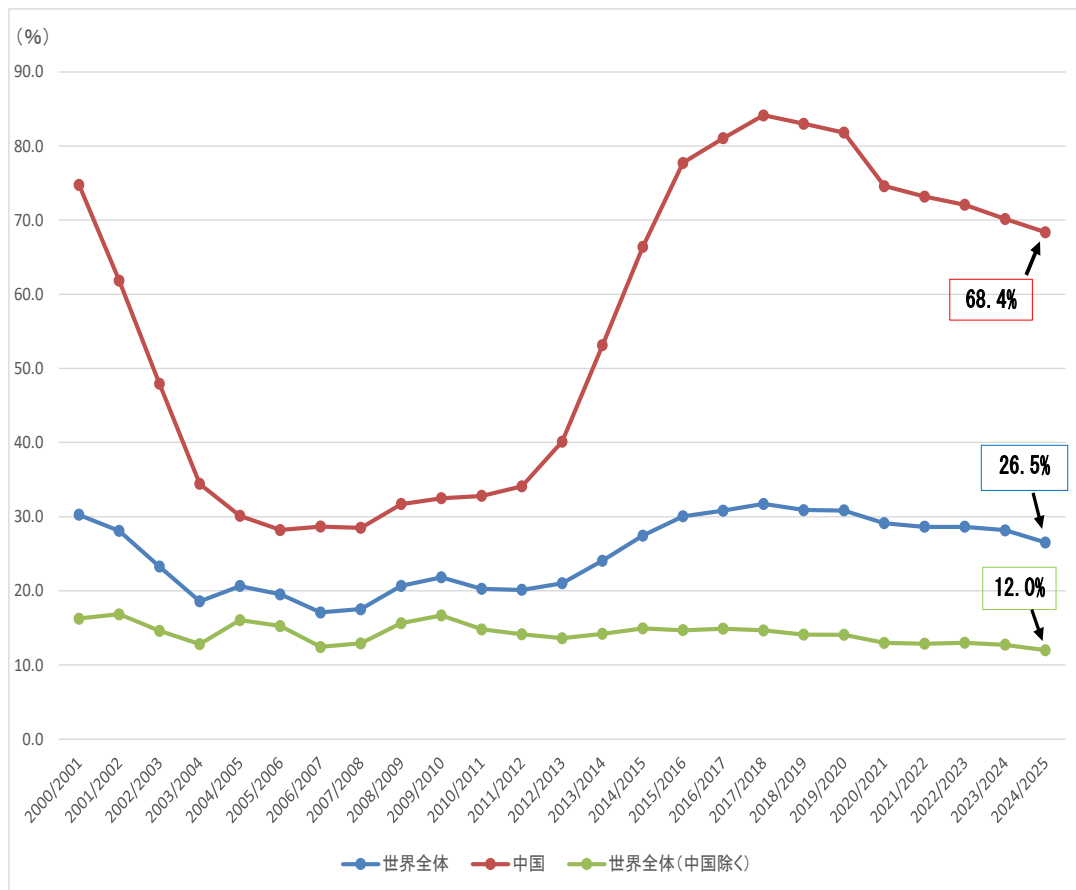


資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(March 2025)、「PS&D」

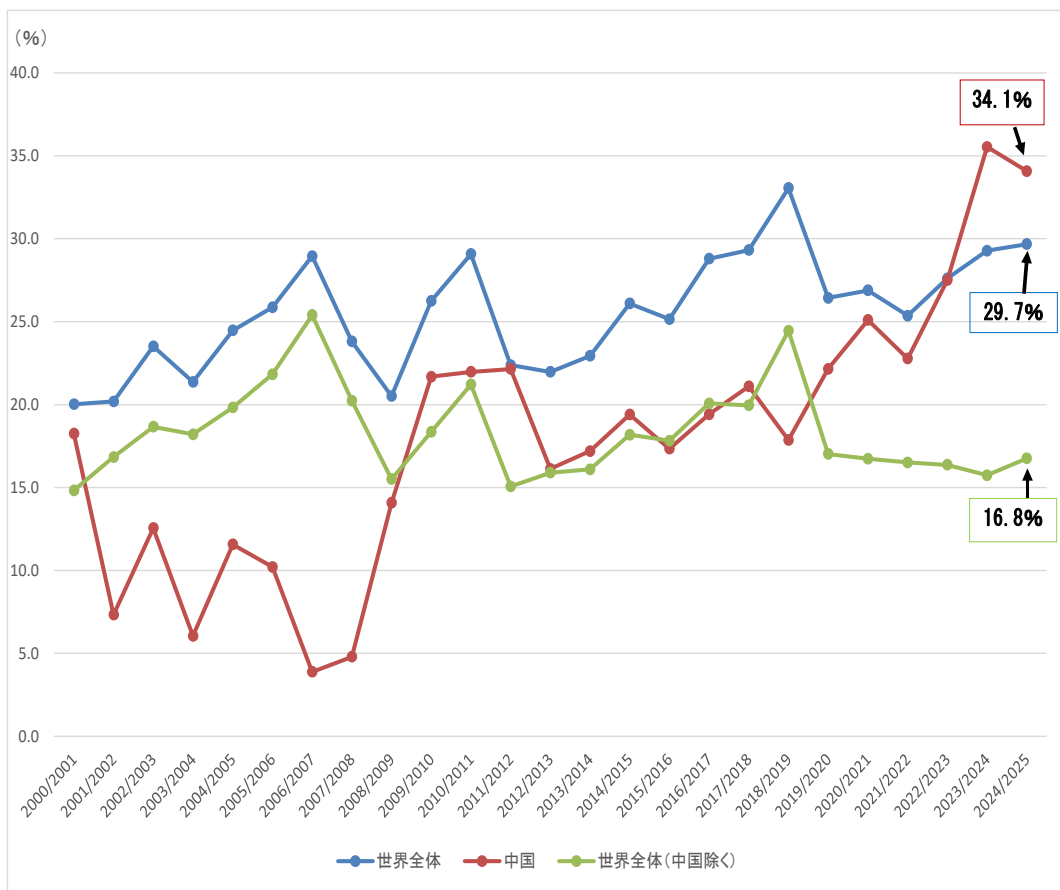
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 11, 2025)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

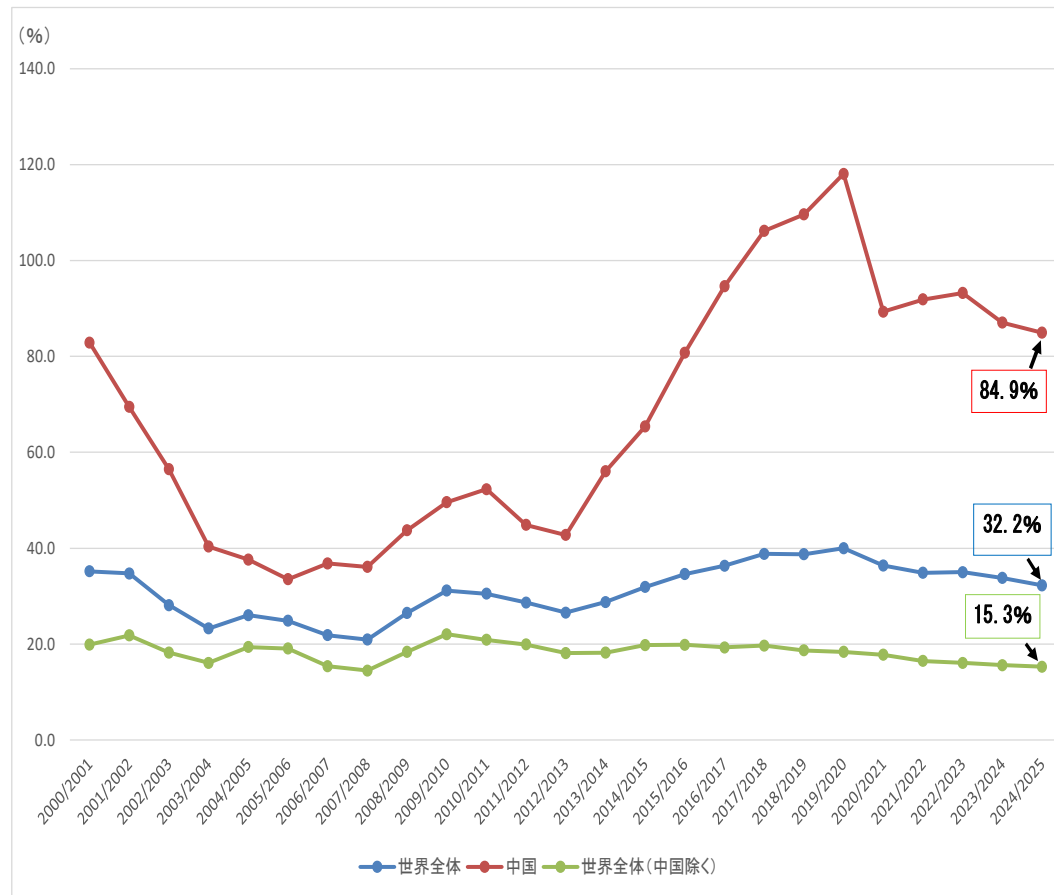
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

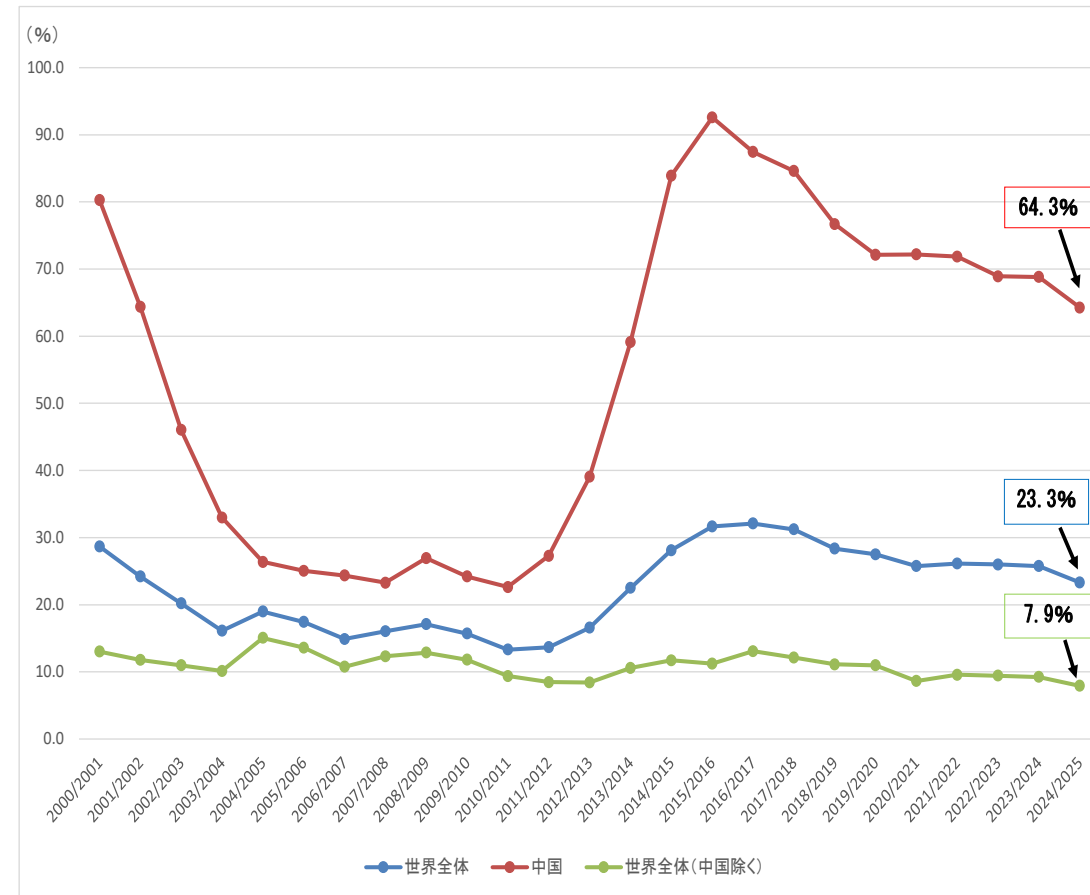
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 11, 2025)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

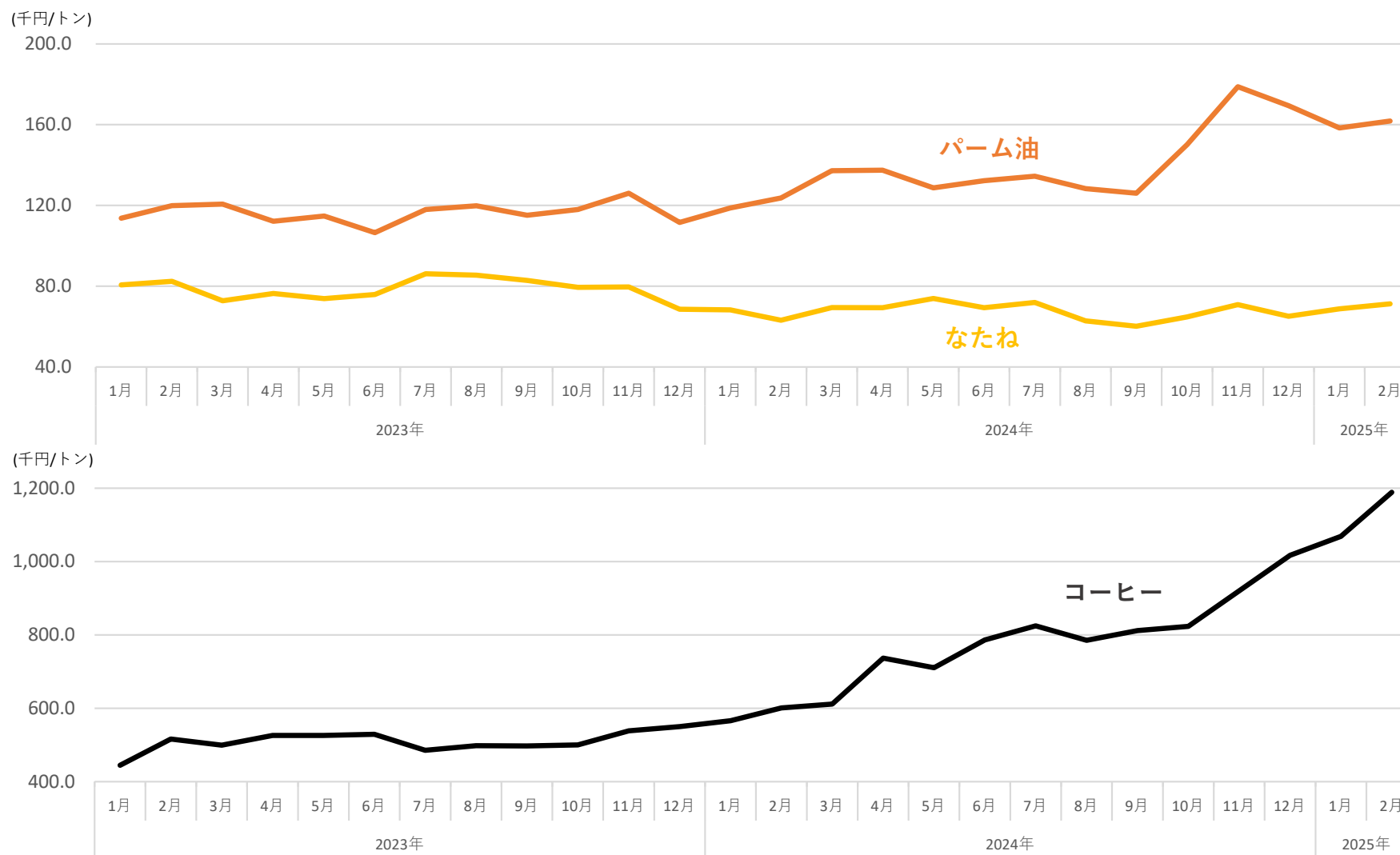
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月以降上昇している。
- なたねについては、安定している。
- コーヒーについては、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、2024年以降上昇している。



2025年3月24日現在
□内は2023年1月以降の最高値。

パーム油
161.8千円/トン
178.8千円/トン
(2024.11)

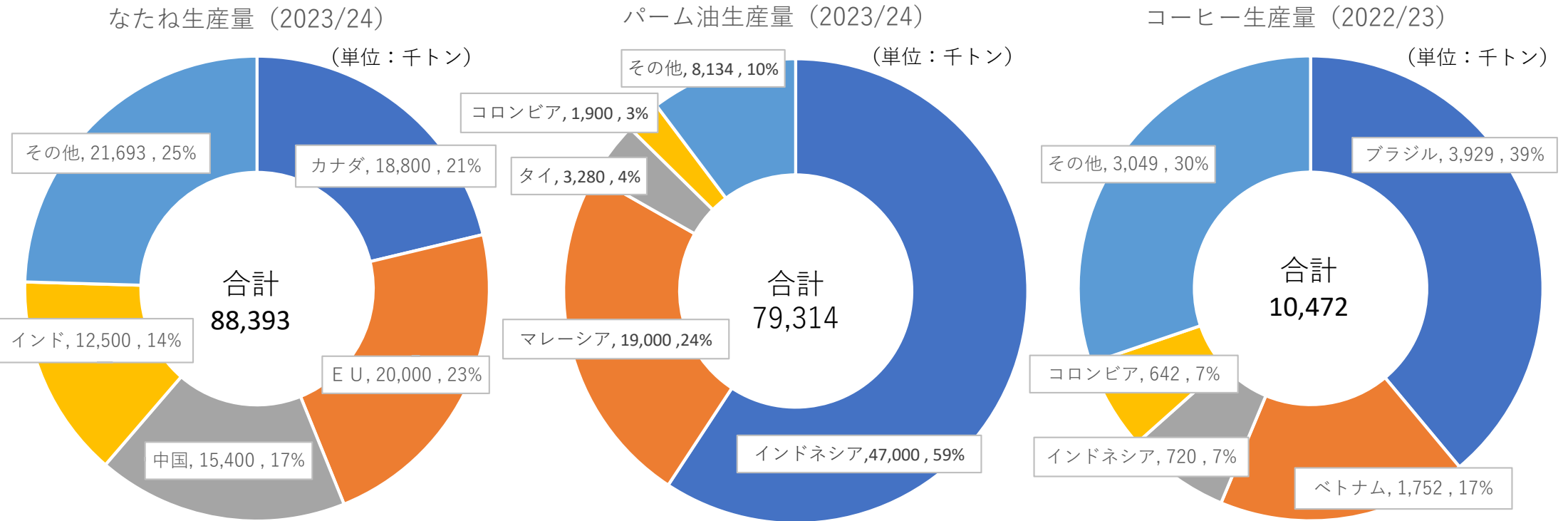
なたね
71.2千円/トン
86.2千円/トン
(2023.7)

コーヒー
1188.8千円/トン
1188.8千円/トン
(2025.2)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年 6 月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年 6 月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2024年 6 月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合	パーム油	輸入量	割合	コーヒー	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%	マレーシア	574	85.6%	ブラジル	124	35.0%
オーストラリア	983	48.6%	インドネシア	96	14.4%	ベトナム	99	27.9%
その他	0	0.0%	その他	0	0.1%	コロンビア	34	9.6%
合計	2.022	100.0%	合計	671	100.0%	その他	98	27.6%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2										
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	161.8										
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	1,188.8										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8										
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2										
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8										
前月 比	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2										
前年 同月 比	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8										

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和7年2月の国内の加工食品の消費者物価指数は114.8～152.8（前年同月比で-3.2%～5.6%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和6年9月～令和7年2月）

	R2	R3	R4	R5	R6				R7		
品目	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.0	99.2	110.3	118.7	122.3	121.6	121.5	121.9	124.6	126.8	4.1%
即席めん	100.0	100.1	107.6	119.7	120.2	118.4	122.0	120.1	118.0	121.2	-3.2%
豆腐	100.0	101.3	105.3	114.6	118.8	119.3	119.7	119.1	119.4	119.3	1.6%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	106.9	144.4	160.2	144.3	146.9	149.8	149.9	149.0	147.6	-2.4%
みそ	100.0	99.3	101.3	108.1	114.8	115.3	114.4	114.0	114.5	114.8	1.9%
マヨネーズ	100.0	105.6	125.6	149.5	153.3	152.7	153.1	153.1	153.9	152.8	-0.9%
チーズ	100.0	98.7	107.5	131.1	133.4	134.6	133.4	128.2	132.9	133.9	1.0%
バター	100.0	99.9	99.2	108.6	120.0	120.1	120.1	119.5	120.0	119.6	0.4%
生鮮食品を 除く食料	100.0	100.2	104.1	112.6	117.8	119.2	119.9	120.1	121.0	121.6	5.6%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和6年9月～令和7年3月）

	R2	R3	R4	R5	R6				R7				
品目	平均	平均	平均	平均	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.0	98.6	107.8	114.5	118.9	118.2	117.4	118.2	122.5	124.0	124.5	0.4%	5.0%
即席めん	100.0	99.2	105.6	117.5	119.1	115.5	118.5	117.3	115.5	116.7	116.7	0.0%	-3.6%
豆腐	100.0	100.6	103.7	113.0	116.7	118.5	119.3	118.0	118.5	118.0	117.6	-0.3%	2.3%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	104.1	140.7	159.4	143.5	144.5	142.9	140.0	140.3	139.7	141.3	1.1%	-6.1%
みそ	100.0	99.2	100.1	105.9	110.2	110.0	110.6	108.8	109.8	110.0	110.4	0.4%	0.2%
マヨネーズ	100.0	102.2	117.7	139.8	141.3	140.6	138.6	140.6	140.6	139.9	138.9	-0.7%	-3.1%
チーズ	100.0	98.1	105.7	126.5	128.8	128.8	128.3	122.3	127.8	126.3	133.7	5.9%	3.0%
バター	100.0	99.8	99.1	108.0	118.8	119.4	119.7	119.2	120.1	119.4	124.8	4.5%	5.3%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2025年4月号（3月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）24年の牛肉輸出量は前年比1.1%減、25年も引き続き減少予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003664.html

（豪州）24年第4四半期の成牛と畜頭数と牛肉生産量、前年同期比で大幅増

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003665.html

（アルゼンチン）24年の牛肉輸出量は引き続き好調で3年連続の増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003666.html

◆豚肉

（米国）24年の豚肉輸出量は前年比4.3%増、25年は同2.5%増の予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003667.html

（EU）豚肉生産量は回復基調、豚枝肉卸売価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003668.html

（中国）24年の豚肉生産量は前年に続き高水準、豚肉輸入量は大幅減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003669.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）高水準の生乳取引価格を背景に生乳出荷量は維持も、輸出量は減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003673.html

（豪州）24/25年度上半期の生乳生産量、前年同期をわずかに上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003674.html

（NZ）生乳生産量7カ月連続で前年同月を上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003675.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）生産減・消費増などから期末在庫はかなりの程度減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003677.html

（世界：大豆）アルゼンチンの生産減、ブラジルの消費増から大豆期末在庫は下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003678.html

（米国）米国の生産量はやや減少、生産者価格は前年度に続き下落

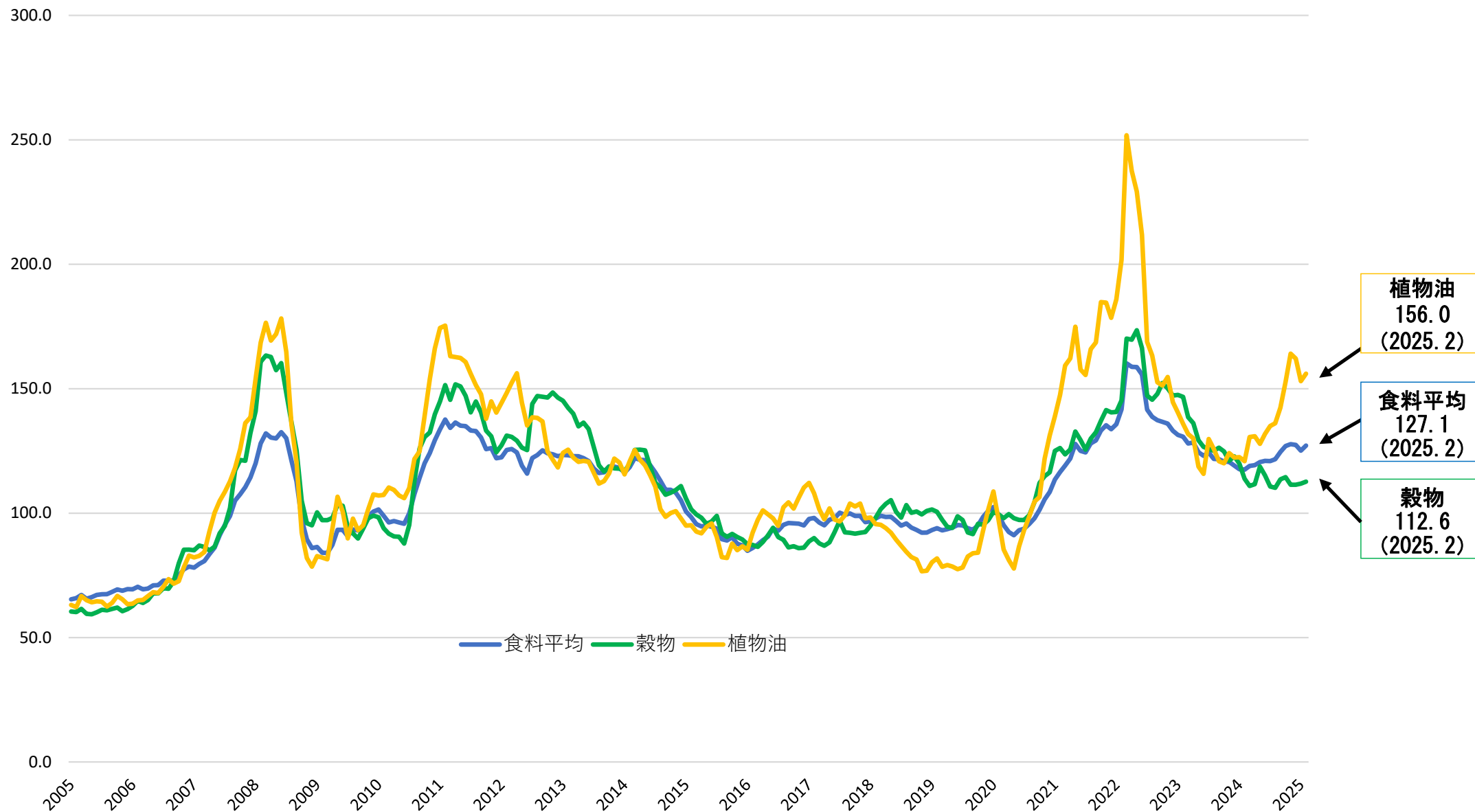
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003679.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003680.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.2)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

インドネシアの食料事情①：食文化（インドネシア料理）

1 はじめに

インドネシアは、約 17,000 の島から成る島嶼国であり、国土面積は日本の約 5 倍、人口は約 2.8 億人を擁する東南アジア最大の国です。また、世界最大のイスラム教徒人口（総人口の約 9 割）を誇り、約 1,300 の民族が共生する多民族国家でもあります。

日本との関係においては、最近、インドネシアからの旅行客や特定技能実習生など人的交流が増えてきています。

今回は、そんなインドネシアの大都市である首都ジャカルタを中心とした食文化について紹介します。

2 インドネシアの食事情

インドネシアの首都であるジャカルタは、約 1,000 万人の人口を抱える大都市であり、甘めの味付けが特徴の「ジャワ料理」やトウガラシ等の香辛料を使った辛い味付けが特徴の「パダン料理（スマトラ島の伝統料理）」など、多民族文化を反映した様々なインドネシア料理を楽しむことができます。インドネシア料理は、「ナシゴレン（炒飯）」や「サテ（鶏肉、羊肉、牛肉の串焼き）」、「ルンダン（牛肉などをココナッツミルクで煮込んだ料理）」等が有名であり、特に「ルンダン」は米 CNN の「The world's 50 best foods」にも選ばれたことがあります。これらの料理は多くの日本人の口にも合う料理です。

また、インドネシアはドリアン、マンゴスチン、ランブータン、パパイヤ、バナナ、パイナップルなどに代表される熱帯の果物が豊富な国で、スーパーや市場ではそのシーズンの果物を手軽に購入できます。ドリアンは「ドリアンストリート」と呼ばれるように、道の両端に延々と屋台が並んで売られている場所もあります。シーズンになると、マンゴーも約 10 種類が市場に出回り、インドネシア人は品種を見分けて、値段、大きさ、色、形、味などの自分の嗜好に合わせて購入します。これらの果物は、インドネシア人の身近な楽しみの一つとなっています。

その他の特徴的な食事情として、日本以上に発達しているフードデリバリーサービスが主流となっていることが挙げられます。インドネシアでは外食や調理済み食品等の消費が多い傾向にありましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により経済・社会活動が制限されたことから、フードデリバリーサービスの需要が拡大しました。スマートフォンアプリで簡単に注文できることから、忙しいビジネスマンや家庭にとっても非常に便利なサービスとなっています。

3 終わりに

今回、インドネシアの食事情についてご紹介させていただきましたが、当地に住んでみた食の感想として、様々なインドネシア料理がある中で、羊肉のサテ（写真1）、ルス（写真2）、マンガーは食べた後に思わず「美味しい」と唸ってしまうほど感動的においしいものでした。近年のインドネシアは経済発展が著しく、日本食料理店も多く進出してきており、物価は高くなっているものの比較的アルコール飲料や豚肉も容易に購入することができ、日本人にとって食の部分でも住みやすい土地だと感じています。

次回は、日本からインドネシアへの農林水産物・食品輸出について紹介したいと思います。

文責：小宮 元晃（在インドネシア日本国大使館 一等書記官）



写真1 サテ（羊肉と鶏肉の串焼き）

主に鶏肉、牛肉、羊肉を串に刺して炭火で焼いたものです。焼くことで香ばしさが引き立ち、外はカリッと、中はジューシーに仕上がります。甘いピーナッツソースやサンバル（辛いソース）を好みで使います。サテは特にストリートフードとして親しまれており、屋台などで手軽に楽しむことができます。



写真2 ルス（牛の肋骨（リブ）を使ったスープ）

牛の肋骨（リブ）を使った料理で、肉が柔らかくなるまで長時間煮込まれます。この柔らかい骨付き肉と半透明で濃厚なスープは共に美味しく食べ応えのある一品です。

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介するものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。